〈書評〉

熊切拓『アラビア語チュニス方言の文法研究：否定と非現実モダリティ』ひつじ書房、2022年、xv+345pp.

藤原敬介

帝京科学大学総合教育センター

Book Review: KUMAKIRI Taku, *Negation and Irrealis Modality: Studies on Grammar of Tunis Arabic*. Hituzi Syobô, 2022, xv+345pp.

HUZIWARA Keisuke

Center for Arts and Sciences, Teikyo University of Science

キーワード：否定、モダリティ、アラビア語諸方言、言語類型論

1　はじめに

本書は、アラビア語チュニス方言[*1]にみられる否定表現に焦点をあて、その機能を研究したものである。

全７章345ページにわたる本書の章立てと概要は以下のとおりである。

・第１章「序論」（pp.1-7）：研究の目的
・第２章「アラビア語チュニス方言の言語学的定義」（pp.9-73）：アラビア語諸方言分類および研究状況とチュニス方言の位置づけ
・第３章「チュニス方言の音韻と文法」（pp.75-112）：アラビア語チュニス方言の簡易文法
・第４章「チュニス方言の否定の全体像」（pp.113-176）：アラビア語チュニス方言の否定表現にかんする包括的な記述
・第５章「否定と文構造」（pp.177-225）：アラビア語チュニス方言におけるma:と-ʃからなる否定表現を文構造の観点から分析
・第６章「否定とモダリティ」（pp.227-265）：ma:と-ʃからなる否定表現をモダリティの観点から分析
・第７章「否定と非現実モダリティ」（pp.267-326）：-ʃの機能を非現実モダリティをしめすものと分析し、ma:と-ʃからなる否定表現の意味を再解釈
・参照文献・あとがき・索引（pp.327-345）

上にしめしたように、本書はアラビア語チュニス方言の否定表現にかんする研究書であるといっても、全体の三分の一ほどはアラビア語諸方言の研究史とチュニス方言の概要の記述にあてられている。一般にある言語の「方言」を記述しようとすれば、まず「標準語」について理解していなければならないし、「諸方言」についてもある程度はしっていることがのぞましい。他と比較することによってはじめて、記述対象の現象が一般的なものであるのか、特別なものであるかがわかるからである。

本書の記述をみれば、アラビア語チュニス方言にかんする研究ではあるけれども、随所に標準アラビア語や他方言との比較がなされている。熊切氏は、つねにアラビア語全体を俯瞰しながらチュニス方言にとりくんでいることがよくわかる。そして「日本語話者だからこそできる気づきにより、この言語の研究に貢献」（p.2）しようとしているところに本書の特徴がある。

以下、評者はアラビア語の専門家というわけではないけれども、本書をよんで気になった点を中心に紹介していく。

2　標準アラビア語との比較におけるチュニス方言の特徴

アラビア語を専門としない評者がアラビア語に対してもっていた印象は、「発音がむずかしく派生形態論が複雑なVSO語順の言語」という程度のものであった。

しかしながら、本書を通読することで、「標準アラビア語が総合的であるのに対し、方言は分析的な

傾向をもつ」（p.24）ということや主語が主題化されるとSVO語順になる（pp.179–180）といったことがわかったことをはじめとして*2、アラビア語に対する印象がおおいにかわった。

標準アラビア語と比較すると統語論が相対的に簡素となっている一方、発音についていえば、「チュニス方言は音韻的には標準アラビア語と大きな違いはない」（p.75）とされつつも、「咽頭化音と喉音が母音に与える影響により、その音声的実現はより複雑」（p.75）になっているという。

派生形態論について評者の目をひいたのは、「動詞派生形C_1C_2a:C_3」（p.37）で記述される標準アラビア語との対応関係である。すなわち、この形式は「標準アラビア語の動詞派生形第IX形 iC_1C_2aC_3C_3aに対応する形」（p.37）であるという。具体的には、標準アラビア語のihmarra「赤くなる（PERF.3SG.M）」がチュニス方言ではihma:rˤ「赤くなる（PERF.3SG.M）」で対応するということである。この対応関係は、標準アラビア語の重子音が単子音になる代償としてチュニス方言では先行する母音が長母音になるという、通言語的にみられる代償延長の一種であるようにみえる*3。

3　アラビア語チュニス方言の否定表現にかんする分析について

標準アラビア語と比較してチュニス方言に特徴的な点は、否定表現である。標準アラビア語でもチュニス方言でも否定辞としてla:およびma:が使用されることは共通している。ただし、標準アラビア語では否定辞la:による否定が一般的である。他方、チュニス方言においては、否定辞ma:のほうが優勢であるだけでなく、否定対象をma:と-ʃではさみこむところに特徴がある。いったい-ʃの機能とは何であるか。これが、本書が追求している問題である。

同様の表現形式は、チュニス方言以外のアラビア語諸方言においても観察されるところであるけれども（p.111）、本書では熊切氏独自の分析がおこなわれる。

さて、チュニス方言におけるma:と-ʃによる否定は、（1）のような動詞句も、（2）のような名詞句も可能である。そして、いずれの形式であっても、-ʃの直前には人称接尾辞をふくむ要素があらわれている。

（1）ma:-kitbit-ʃ　　ha-l-kta:b
NEG-書く-PERF.3SG.F-IRR　この-DEF-本
「彼女はこの本を書かなかった」（p.118［4-7］）

（2）a. ma:-ʕi:n-i:-ʃ　　fi-l-ma:kla
NEG-ほしい-1SG.GEN-IRR　中に-DEF-食べ物
「私は食べ物はほしくない*4」（p.124［4-34］）

b. ma:-k-ʃ　　wild　　asˤl
NEG-2SG-IRR　こども　家柄
「あなたは良い家柄の者ではない」
（p.129［4-44］）

名詞文を否定するばあいには、人称接辞はもちいず、（3）にしめすようにmu:ʃを否定対象に前置するだけでよい。

（3）haði:　　mu:ʃ dabbu:za
これ SG.F NEG 瓶 SG.F
「これは瓶ではない」（p.128［4-43］）

以上のように、チュニス方言における否定は、概略としては、人称接辞があらわれる文に対してはma:と-ʃではさみこむ否定をもちいるのに対し、あらわれない文に対してはmu:ʃのみによる否定をもちいる。前者はより動詞的な文であり、後者はより名詞的な文であるように評者にはおもわれる。

ところが、副詞（本書では「θamma:存在文」とよぶ）の否定においては、ma:と-ʃではさみこまれているにもかかわらず、（4）にしめすように、人称接尾辞があらわれない。

（4）ma:-θamma:-ʃ　tˤa:wla　fi-l-bi:t
NEG-ある-IRR　テーブル　中に-DEF-部屋
「部屋の中にテーブルがない」（p.125［4-39］）

本書の課題は-ʃの機能を説明することで、この一見例外にみえる現象をいかに分析するかというところである。

そして結論として熊切氏は（5）のような分析を提示する。

(5) a.「ma:-は単なる否定辞ではなく、否定を現実的なものとする現実的否定辞である」(p.319)
b. -ʃは「非現実モダリティ辞である」(p.318)
c.「否定辞ma:-は、現実的否定辞であり、これを非現実的否定文とするためには、非現実モダリティ辞である-ʃがなくてはならない」(p.323)

熊切氏の議論をよみすすめれば首肯するところがおおきいとはいえ、評者には(6)にしめす二点が疑問としてうかんだ。

(6) a. (4)のような否定文においては、人称接尾辞がないのではなく、ゼロであると分析することはできないだろうか。もしもできるならば、統一的な分析が可能となるようにおもわれる。
b. 先行研究による分析を検討するなかで、-ʃを「不定数量詞とする説」(p.279)もあがっている。そして、熊切氏は「-ʃの出現を文中の不定性と単純に結びつける捉え方はチュニス方言においてはできない」(p.280)とする。しかしながら、-ʃを「不定」ととらえることと、-ʃに「非現実モダリティ」の機能があることとは相関しているようにおもわれる。

このほか、否定に関連して評者の目をひいたのは、(7)にあげる二点である。

(7) a. 否定と疑問の相関
b. 否定のmu:ʃが「強い断定」となる例

(7a)について、本書で否定と関係する「非現実モダリティ」とされる-ʃは、疑問詞a:ʃ「何」にみられるʃとおなじものであるという*5(p.281)。本書で明確には記述されてはいないけれども、ʃku:n「誰」(p.233)におけるʃも関係しているかどうかが気になった。もしも関係しているとすれば、同一の機能をもつ形態素が接頭辞的にも接尾辞的にも機能しているということになる。このような分布は、たとえば音素配列上の制約といった音韻的な条件によるものであるのか、統語的なものであるのか、意味的なものであるのか、熊切氏の見解をきいてみたいところである。

(7b)については、たとえば(8)のような例があがっている。

(8) mu:ʃ　　qut-lik?
強い断定　言う　PERF.1SG-2SG.DAT
「お前に言っただろ!」(p.261 [6-66])

mu:ʃは、(3)でもしめしたように、否定辞である。しかし、それが「強い断定」として使用されるという現象が印象的である*6。

4　おわりに

以上、簡単にではあるけれども、『アラビア語チュニス方言の文法研究』を評者の興味にひきよせて紹介してきた。本書の要点は熊切(2019)[1]でもよむことはできるけれども、ぜひ本書そのものを手にとってよんでもらいたいとおもう。

「あとがき」で熊切氏は「つねに言語事実に立ち返ろうとする、こうした姿勢は、私がこれまで教わった多くの先生がたから学んだものである」(p.340)とのべる。これは熊切氏の師である故・湯川恭敏東京大学名誉教授による「言語は極めて「頭のいい」存在であり、それに比べてはるかに「知能の劣る」我々個々人が、その言語の真の姿を知ろうとするならば、こまっしゃくれた先入観を捨てて、徹頭徹尾その言語から素直に学ぶしかない」(湯川 1999：5)[2]という考え方に影響をうけたものであろう。

熊切氏は「1997年10月より東京在住のチュニジア人男性(チュニス出身)を調査協力者として、チュニス方言の調査を始め」(p.4)、途中「言語学研究室を離れ」(p.338)た期間が「15年以上」(p.338)あった。それでも、評者が確認した範囲では、熊切氏は本書のもととなった博士論文を提出する前から旺盛に研究を推進し、日本言語学会において2017年11月の第155回大会から2022年11月の第165回大会にいたるまで、ほぼ毎回口頭発表をしているだけでなく、発表内容をほぼすべて論文としても発表している。これだけ継続的に日本言語学会で発表している人を、評者はほかにしらない。

熊切氏が今後も「言語から素直に学」びつづけ、アラビア語チュニス方言の包括的な記述文法をまとめあげるであろうことを評者は確信し、いつか出版されることを期待している。

附記

本書が丁寧な仕事であることは、誤植のすくなさにもあらわれている。以下にしめすものは、評者からみて気になったかずすくない誤記あるいは疑問のある表現の一覧である。いずれも内容の理解には影

響しないものばかりである。

1．p.37：sとʃの混同とあるのは、標準アラビア語を基準としてみたばあいのものであろう。アラビア語ʃəms「太陽」に対するモロッコ方言ʃəmʃという例をみるかぎりでは、モロッコ方言では「混同」しているのではなく、「同化」しているといえるようにおもえる。
2．p.79：CVの例としてθamma:は不適切だろう。
3．p.115（4-2）：３つ目の例である［mənmu:tʃ］にも、どこに強勢があるかをしめすべきである。
4．p.162（4-151）：冒頭のlaは、おそらくla:である。
5．p.175*19：qut-likが「特殊な形」というのが、何と比較してどのように特殊であるかを明記したほうがよいだろう。
6．p.178など：「人称表示」は「人称標示」とするのが一般的だろう。
7．p.326*16：冒頭で接頭辞ʃ-として表記されているけれども、後続する具体例は接尾辞のものなので-ʃとすべきであるだろう。

【注】

1　「国語とは陸海軍をそなえた方言である―マックス・ワインライヒ」（田中 1981：107）[3] ともいわれるように、あることばが「国語（言語）」とよばれるか「方言」とよばれるかは、恣意的なものである。ただし本稿では、熊切氏に（そしておそらく日本のアラビア語学一般の慣習に）したがい、チュニス方言とよんでおく。なお、本書においても奥付には英語の題名として *Tunis Arabic*が採用されており、*Tunis dialect*とはされていない。

2　ただし、主語が主題化されるとSVO語順になるということが明記されるよりも前に、SV語順の例があらわれることがある（p.118［4-8］）。そのようなときには、何か説明があったほうがよかっただろう。特にp.122（4-27）にある「彼女のような女はいない」という例は、「彼女についていえば、一人の女も彼女のようではない」と訳出するほうが、チュニス方言の原文により忠実であるようにもおもわれる。なお、チュニス方言の主題化については熊切（2018）[4] が参考になる。

3　重子音の単子音化による先行母音の代償延長は、たとえば中期インド・アーリア語から新インド・アーリア語への変化にもみられる（Masica 1991：187）[5]。

4　「ほしい」と訳されるʕi:nの原義は「目」であり、この語は本来的には名詞であるといえる。熊切氏によれば「ʕi:n-構文はアラブ文化における目の力への信仰（たとえば邪視など）」といった「チュニス社会が重視する価値観に関係づけられるかもしれない」（p.208）とのことである。

5　疑問と否定が相関しているとすれば、評者が専門とするチベット・ビルマ語派ルイ語群に属するチャック語における疑問語疑問文標識の=á（Huziwara 2016: 37）と、おなじくルイ語群に属するカドゥー語における否定述部のá（Sangdong 2012: 484）とが同源形式である可能性があり、興味ぶかい[6, 7]。

6　たとえばバングラ語では、現在命令形にnaをつけると強い肯定命令になるのに対し、未来命令形にnaをつけると否定命令形となる。丹羽（2018：61 改変）[8] の例をあげる。

(i)　a. lekho　　na
　　書く 2SG.PRS.IMP NA
　　「書きなさいな」
　　b. likho　　na
　　書く 2sg.FUT.IMP NA
　　「書くな」

あるいは、英語で*priceless*といえば「価値（price）」が「ない（-less）」という意味ではなく「とても価値がある」という意味になる。日本語でも「無数」といえば、「数がない（存在しない）」のではなく「とてもたくさんある」という意味になる。語構成から推定される意味とは逆になっている。

このように、本来的には否定と関連する要素の意味が反転する現象に興味がもたれる。

参照文献

1．熊切拓：アラビア語チュニス方言における否定と非現実モダリティ．*言語研究*，156：97-123，2019.
2．湯川恭敏：*言語学*，ひつじ書房，東京，1999.
3．田中克彦：*ことばと国家*，岩波新書，東京，1981.
4．熊切拓：アラビア語チュニス方言において主題をもつ文の並列が意味するもの．*東京大学言語学論集*，41：155-179，2018.
5．Masica, Colin P.：*The Indo-Aryan languages*, Cambridge University Press, Cambridge, 1991.
6．Huziwara, Keisuke：*Cak-English-Bangla dictionary: a Tibeto-Burman language spoken in Bangladesh*, A H Development Publishing

House, Dhaka, 2016.
7．Sangdong, David：*A grammar of the Kadu (Asak) language*, Ph.D. dissertation, La Trobe University, 2012.
8．丹羽京子：*ニューエクスプレスプラス　ベンガル語*，白水社，東京，2018.